
とある神父の潜入捜査

非魔神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある神父の潜入捜査

【NNコード】

N8409M

【作者名】

非魔神

【あらすじ】

イギリス清教必要悪の教会所属の神父、ステイル＝マグヌスはある事情から高校の捜査を余儀なくされる。

神父と高校が交差する時　物語は始まる！

1話 転校生

イギリス清教、必要悪ネセサリウスの教会のある一室にスタイル＝マグヌスと神裂火織はいた。

「よしへは、着替えてください、スタイル」

神裂が「ぐく一般的な制服を差し出す。

「何の冗談だ、神裂」

煙草をくわえたまま、スタイルの口が引きつる。

「潜入捜査です。今からスタイルにはとある高校に潜入してもらいます」

満面の笑みを浮かべた神裂がスタイルに制服をぐいぐいと押し付ける。

「まさか、あいつがいるところじゃないだろ？」「

スタイルがツンツン頭の少年を思い浮かべながら言つて、

「そのまさかです。早く着替えてください。今日の八時には学校にいないといけないんですから」

現在、時刻は早朝の五時。

どうやって八時に学園都市にたどり着くのかと考えるが、空飛ぶ

拷問室を思い出して視線を泳がせた。

神裂はステイルの腕を強引につかんで試着室のよつなとこひに無理矢理入れる。

出られないように外側からテープで貼り付ける。

最後に上から制服を放り投げる。

「神裂、僕を誰だと思っているんだ？」

ルーンのカードを試着室一面に貼り付ける。

「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる 」

魔女狩りの王と呼ばれる教皇級の兵器を呼び出そうとするステイル。

「無駄ですよ、ステイル。その中で魔術を使つことは出来ません」

外から神裂の落ち着き払つた声が聞こえる。

「ん？」

「その小さな部屋は何重もの術式で火に関連する魔術を封じています。無駄な抵抗をせず早く着替えてください」

「くつ……」

ステイルはあきらめ、着替え始めた。

「この服だってちゃんとした意味があるんだ。簡単に脱ぐものじゃないのに……」

スタイルがぼやく。

「今日は戦闘が目的ではありません。報告にて靈装は必要ないでしょ
う?」「

神裂が言つと、スタイルは、はあ、とため息をついて着替えを続
ける。

数分後……。

スタイルが試着室から出てくる。
2mを越える身長が見事に制服に着られている。

「似合いますよ、スタイル」
「からかつてるとか」
「いえ、全然」
「はあ……。もう、行つていいかい?」

スタイルがため息をつきながら言つと、

「いいわけないです。高校に行くんですよ。その日の下の刺青を消
してください」
「いや、これは」
「やかましいこのド素人が!..」

神裂の言葉にスタイルの表情が凍る。

「高校行くんだぞ！ バーニーなんておかしいに決まつてんだろ
うが！」

「あ、あの、すいません」

女には勝てないな、とスタイルは心の中で苦笑いしながら謝った。
「じゃあ、この人工皮膚を重ねといてください。三十分でなじみま
す」

薄だいだい色のぶよぶよしたものを神裂から受け取る。

「消さなくて良いのか……」

スタイルの声に安堵が戻ったとき。
神裂はスタイルがわざわざまで来ていた服を探つていた。

「何をしてるんだ！」

「煙草を探しています。没収しますので」

笑顔で答えて、服のポケットを順番にひっくり返す。
タバコのケースが次々と床に落ちた。

「ちょっと待て。あいつがいてさりと一二チんとタールがないって
地獄以外の何者でもな」

「黙つてください」

「…………、」

一通り、煙草を奪い取つて。
小さな箱を差し出す。

「これは土御門からのプレゼントです」

……とある高校。

「はい、上条ちゃん。机に突っ伏してないで聞いてくださいね～
「上条さんは瀕死のようです」

上条がそつそつ机に突っ伏したままだ。

「今日は転校生を紹介します」

ざわざわ、と教室が沸く。

時期的に明らかにおかしいが、朝から立て続け不幸に見舞われ精神の参つている上条はそんなことを気にする余裕も無かつた。

「転校生は男だ」。野郎ども。愁傷様。子猫ちゃんたちおめでとう

上条はその体勢のまま、ガラツヒドアの開く音を聞いていた。

すると、かつこいい～という女子の声や、でけえ……、という男子の声で教室がカラオケボックス並の音量となつた。流石に気になつた上条は顔を上げる。

「……なつ～」

1話 転校生（後書き）

「指摘」、「感想」、お待ちしております。

顔を上げた上条が見たのは、右目の下にバー・コードの刺青があり、派手なアクセサリーをまとつた、身長2mを越える赤髪の神父、だつた男だ。

現在は上条と同じ制服を着て右田の下のバー・コードもなく、アクセサリーの数も少なく、香水の匂いすら漂つてこない男だが、確実にスタイル・マグヌスだつた。

「お前、何やつてんだよ！？」

上条ががたつと立ち上がり、スタイルを指差しながら言つ。

「え？ 僕は、転校生だけ？」

「転校生とかふざけたこと言つてんじゃねえよ！」

上条が動搖して頭がつまく回らない。

「捨井ちゃん？ 上条ちゃんと知り合いなんですか？」

子萌先生が口を挟む。

「捨井ちゃん！？」

上条が色々な部分に驚きを隠せない。

まず、偽名がおかしすぎる。

そして、さらに子萌先生がちゃん付けといつににも驚いた。二人の面識は大覇星祭のときぐらいではないだろうか。

「いえ、先生。いんなやつ知りません」

「先生！？」

動搖する上条が他の生徒を見回すと、大体は冷たい目線かはてな
の目線を向けてくるが、土御門だけはニヤニヤ笑っている。
とりあえず、上条は座った。

「（どうこう）どだよー、土御門）」

上条が声をひそめて訊く。

「（話は後だにやー、カミやん。とりあえずは子萌先生の話を聞く
んだぜー）」

土御門の言葉を聞いてとりあえずは席に座る上条。

「すてい 捨井 りゅうま 流馬です。至らぬ点もあると想こますかよろしくお願ひし
ます」

「捨井ちゃんはイギリスからの帰国子女なんですよ。今回は長点上
機学院からの転校なのです」

長点上機学院！？ とクラスがざわつく。長点上機学院といえど、
学園都市でも五本の指に入るHリート校だ。

ムチャクチャだ、と上条は思った。

確かにイギリスから来たのは本当だろ？。長点上機学院は能力開
発以外でも一芸に突出していればやつていける。
筋は通っている。だからいや、おかしい。

「じゃあ、捨井ちゃんは後ろの空いてる席に座つてくださいね」

「はい。わかりました、先生」

スタイルが上条に向かつて歩いてくる。

スタイルは上条の横を通り過ぎる時、ふと笑つていった。

「じゃあ、さつと次の授業の準備をするのですよ~」

先生がそういうと、クラスが一気にうるさくなつてクラスの半がスタイルの周りに集まる。

「私のときは、こんな反応はなかつた。」

姫神は自分の席に突つ伏したままそんな台詞をつぶやいていたがとりあえず気にしない。

スタイルが質問攻めになつているのをとりあえず無視して、上条は土御門に向き直る。

「どうこうことだ? 話を聞いても分からんだけど」

上条は質問する。

ちなみに青髪は嫉妬からか何からか質問攻めに参加している。本能的にスタイルが年下の男の子であることを感じ取つたのかもしれない。

「捜査だにやー」

捜査? と上条は首をかしげる。

「Jの学校に魔術×オカルト×首を突つ込んだやつがいるらしいんだにやー」

土御門が当たり前のよつに言った。

「……！ つてことは魔術師がこの学校に？」

「違うぜい。まだ魔術師といえるレベルじゃないぜよ」

？ と上条は首をかしげる。

「昨日の夜、この学校で魔力の反応があつたんだにゃー。だけど、本当に微弱なものだつたんだぜい。だから、初心者が誰かが儀式の真似事でもしてゐつて言つのが上の考えなんだにゃー。その捜査をしにきたのがスタイルつてことだぜい」

土御門が説明を終えた。

「魔術なんて初心者が適当にやれるもんなのか？」

上条が当たり前の質問をする。

「普通は出来ないにゃー。魔術はそんな簡単じゃないぜい」

土御門はそこで言葉を切つた。

「でも、そいつが三沢塾の元生徒だつたら？」

「…………」

上条は思い出す。

記憶を失つてから初めて遭遇したあの事件を。

「つていつも簡単なことじゃないぜい。大体の記憶はアウレオルスが消してゐるだろつしにゃー。記憶操作と相性のいい能力だつた、

とかそんなんじゃないのかに」やー？」

土御門が適当な推測を並べる。

「そんなアバウトで良いのかよ。ちやんと見つかるのか？」

「やー」はスタイルを信じるに「やー」

どうやら上条のクラスはあきやすい性質らしい。

スタイルはもう、開放されていて、上条の後ろに立っていた。

「勘違いするな、能力者。僕の仕事はエセ魔術師の発見と報告だ。そつでなければ、こんなところにくるのはむしろが走る」

「はあ…………」

上条はとりあえず一時間田の体育に間に合つて、校舎裏のバスケコートへ向かった。

一人になったスタイルが呟く。

「体育……だつて？」

2話 三沢塾（後書き）

次回は読む意味が全く無いです。

ご指摘、ご感想をお待ちしております。

3話 バスケ（前書き）

今日はタイトル通り、バスケだけです。
一度スタイルにスポーツをさせてみたかつたんです。
バスケを全然知らない方、興味の無い方は最初の方だけ読んでいた
だければ話の流れはつかめます。

3話 バスケ

（「この高校に元三沢塾生は8人。そのうち3人がこのクラス……）

神裂からもらっていた体操服に着替えたスタイルはため息をついた。

（何の因果か腐れ縁か知らないが、同じクラスで生活するなんて……）

初日の一時間目から遅れではまずいと思い、スタイルは校舎裏のバスケットコートへ向かう。

（不幸だ……）

嫌いな少年の台詞を、歩きながら呟いた。

スタイルがついたころには他の男子はアップを済ませていた。

「捨井！ 遅いじゃん」

緑色のジャージを着た体育教師がそこにいる。

どうやら、運動場での女子の体育は別の先生が授業をしているらしかった。

（ん？ この学年担当の体育教師は一人じゃなかつたのか？）

スタイルは疑問を感じるが時間が無いと思いつすぐに飲み込んだ。

「すいません」

スタイルは小さく頭を下げて謝る。

「早くアシップあるじゃん」

体育教師の言葉を受けて、スタイルはバスケットコートの周りを走り始めた。

それに併走するように土御門元春と青髪ピアスがついてくる。

「スタイル じゃなかつた捨井。勝負ぜよ」

唐突に土御門が宣戦布告をする。

口元をにやつかせる土御門に対し、青髪は鬼のような形相を浮かべていた。

「（子萌センサーに手を出すやつは許さない。子萌センサーに手を出すやつは許さない）」

青髪の口の端から漏れる声が不気味さをさらに増幅させる。

「そういうことだにやー。スタイルはBチームだぜい。俺と青髪はAチームだからにやー。手を抜くんじゃないぜよ」

土御門はそういうて、前方へ走つていった。

「捜査だ、つて分かってるだろうね？」

言葉をかける相手がいない状況で頬を引きつらせながら言った。

とりあえず、スタイル vs 上条 & 士御門 & 青髪。ピアスのバスケット対決が始まった。

その他多数も含む。

ちなみに両チームに一人ずつ、元三沢塾生がいる。
もう一人は女子の中にいた。

ジャンプボール。

上条のチームは青髪。ピアスが、もう片方は、無論スタイルが立っている。

身長差は明らかで頭一つとは言わないまでもそれに近い差があった。

青髪が恐ろしい目線をスタイルに送るが、スタイルは気にしない。

というより、気にしないようにしている。

「じゃあ、始めるじゃん」

黄泉川の手からボールが上に放たれる。
二人は同時にジャンプした。
バンとボールがはじかれる。

「くつ……」

「カミayan！」

はじかれたボールを青髪の向かいの上条が取る。
要するに、ジャンプボールは青髪が勝つた。

「土御門つ！」

上条は土御門にバスする。

ボールを受け取った土御門はスリー・ポイント・ラインの内側までドリブルで歩を進め、そこで止まつた。

土御門はそこからタツと軽くジャンプするとショートを放つ。

「スペッ！ とボールはゴールに吸い込まれた。

スタイルが振り返つて走り出したときにはすでにボールがネットを通り抜ける時だつた。

「何してんだ？ 捨井。オフェンスだ、オフェンス！」

男子生徒1に声をかけられ、スタイルは我に返る。
スタイルはとりあえず、ゴールしたに立つた。

「捨井！」

男子生徒2ぐらいの声を聞いて、振り向くとボールが飛んできている。

スタイルは制限区域の少し外側でそのボールを取つた。
その場でターンすると、ボールをうつ。

ゴンとボードに一度あたつてからボールはゴールを通過する。

土御門がエンドラインから上条にボールを出した。

上条はドリブルでハーフラインを超えたが、そこで足元の石につまづく。

ボールは丁度胸の下敷きになる位置にあって……。

「ゴハツ！」

肋骨と地面にボールを挟んだ状態で上条は倒れた。

「カミやん、大丈夫かにゃー？」

土御門が近寄つて声をかけてくるが、その顔は笑っている。

「あ、ああ、大丈夫だ」

上条が立ち上がり、再びボールをつかむ。
ドリブルを再開して、スリーポイントラインからショートを放つた。

放物線を描いたボールはリングにガコンと弾かれる。
ゴール下には青髪とステイルがいた。

しかし、ステイルは青髪にスクリーンアウトされていて中に入れない。

リバウンドを取つた青髪はジャンプしてスッとゴールを入れる。

男子生徒3ぐらいが男子生徒1にパスを出した。

男子生徒1からロングパスがステイルに出る。

ステイルはそれを受け取ると、スリーポイントラインより外からショートを放つた。

ボールは真っ直ぐ飛んでいくが、全く届かず、地面に落ちる。

ポンポンポンとボールの弾む音が悲しく響いていた。

最終結果、上条チーム43点。
スタイルチーム14点。

3話 バスケ（後書き）

すいません。

バスケが分かんないと読めない話ですね。

バスケ描写の中には物語上重要な部分はありませんのでとばしていただいて結構です。

スタイルや土御門の運動能力には色々と根拠があるつもりなんですが、長くなるので省きます。

疑問点があつたら感想に書いていただけると幸いです。

ご指摘、ご感想お待ちしています。

4話 タバコ（前書き）

日常編、そして黒幕の影が見え隠れする回です。

4話 タバコ

「スタイルって運動できないんだな」

今、教室への道をスタイルと上条と土御門で歩いている。

「魔力を大量に精製する副作用だ」

スタイルは上条の言葉が気に入らないように言った。

青髪は、『臨時で来た女子の体育の先生がすごく美人らしい』と
いう噂を何故か授業終了前から知り得ており、既に運動場へと向か
っていた。

「で、どうやって探すんだよ。その元三沢塾生を」

上条が質問していく。

「地道に探すしかないぜよ。なんせ、俺もスタイルも索敵魔術を使
えないからにゃー。使ったところでむこうの魔力の反応が小さすぎ
てほとんど位置を絞れないにゃー」

土御門が気軽に答えた。

少し声が大き過ぎやしないか、と心配になる。

スペイをやっている身でそんな単純なへまはしないだろ、とス
テイルは無理矢理自分を安心させた。

「ちょ、ちょっと待て。だつたらどうすんだよー!?」

「それほど心配することは無いよ。この学校に元三沢塾生は十人も
いないからね」

とりあえず簡単に答える。

正確に言うと八人だが、細かいことまで教える必要はない。

「それよりもなんで君が話に参加してるんだい？」

「えつ？ 僕つてもしかして部外者なのか？」

上条は意外そうな顔をした。

「当たり前ぜよ、カミちゃん。今回はスタイルが決着をつけた三沢塾事件に関わってるからスタイルが来たんだにやー」

「だったら、俺も関係あるじゃねえか」

「何言つてんんだにやー？ あの事件でカミちゃんは使われてただけだぜい」

「それ、ひどいな」

隣での生産性の無い会話を聞き流していると、すぐ教室に着く。教室に入る時に、大急ぎで逃げるように走つていく生徒を見たが気にしないことにした。

（少し太めで身長は平均ぐらい、後眼鏡をかけていたな……）

とりあえず容姿だけ記憶しておく。

一時間田の化学。

小テストがあり、スタイルは気分を落ち込ませる。

今のスタイルにとつて授業はただの邪魔物でしかない。

出来る」となら授業など放つておいて校舎内を調査したいといふだ。

しかし、それを見つかってにわか魔術師に暴走するきっかけを与えてしまっては元も子もない。

スタイルの任務は報告であり、危険分子を突き止め、事が起る前に対処できる状況をつくることが重要だった。

しかしスタイルは小テストをすらすらと解いていく。化学は基本的に得意ではないスタイルだが、この問題を解けないはずは無かつた。

「捨井、何点だった？」

隣の名前も知らない生徒に訊かれる。

「100点」

端的にそう返した。

「な、何でー?」

近くで聞いていた上条が驚きの声を上げる。

説明が面倒くさいスタイルは無言で小テストの紙を差し出す。

「…………炎色反応?」

テストは炎色反応のテストだ。

簡単に言えば、いろんな物質を燃やしてどんな色の炎が出るかで物質を見分けるというものだ。要するに炎の話。

スタイルが間違つはずが無かつた。

三時間目。

子萌先生が教壇に立つてゐる。
スタイルは段々ライライしてきていた。
貧乏ゆすりが徐々にスピードを増していく。

「（どうしたんだ？）」

「（何でもないよ。何でも）」

上条の問いに無理矢理答えたスタイル。

しかしライライはどどまるごとを知らなかつた。

次第に痛みが無ければ正氣が保てなくなり、首をかきむしむ。

「う、うひ……く……」

自然に口から声が漏れた。

そんなとき、後頭部にコツンと何かが当たる。

スタイルは落ちた紙飛行機を拾い上げた。

紙飛行機が飛んできた方向を見ると土御門がニヤニヤと笑つている。

スタイルは土御門を炎剣で焼ききつてやひつといつ衝動に駆られた。

が現在魔術の威力が小さいことと授業の最中であることを思い出して踏みとどまる。

とりあえず、紙飛行機を開けることにした。

忌々しげに土御門をにらみながら折り目を無くしていく。

『苦しみでるみたいだにゃー。やつぱり一ノコチンとタールのない世界は苦しいかにゃー?』

スタイルのイライラは加速する。

要するにスタイルは煙草が吸えなくてイライラしていた。
染髪やピアスやサングラスが認められている自由な校風の高校だが、さすがに触法行為である未成年の喫煙は許されないだろう。
さらに今は大覇星祭のときたつぱりと説教されかけた子萌先生の前なのだ。

そのときの件は『兄だつた』という強引な理由で誤魔化したが、さすがに吸う気にはなれなかつた。

第一に吸うタバコが無いのだから、どうしようもないわけだが。
気を取り直してスタイルは続きを読む。

『神裂からもらつた小さな箱はあるかにゃー? あの中に一ノコチンガムがあるぜよ。噛んで気を紛らわすといいぜー』

そこまで読んでスタイルは目から涙をこぼしそうになつた。
ここまで人に感謝したことなんてこれまであつただろうか、と思つほどだつた。

スタイルは小さな箱が入つてゐるポケットをじしゃくと探る。
しつかりと箱は入つてゐた。
その中のガムを一気に全部口に入れる。
噛み碎くように歯を動かした。

「いはつー。」

舌と口内に痛みを感じて口に入れたガムを全て吐き出す。

「げほげほ！」

スタイルは思いつきり咳き込み、周囲の視線が集まる。

「何してるんですか？ 捨井ちゃん」

教壇に立つ先生が心配そうに小首をかしげている。
事情を話すわけにもいかない事情なので、

「……何でもないです。先生」

と言づしかなかつた。

授業が終わり先生が出て行つたのを確認すると、スタイルは真っ先に土御門の胸倉を掴む。

「どうこうとか説明してくれるかい？」

青筋が浮き出て、口の端の引きつったスタイルが問い合わせた。

「ちよ、ちよっとした遊び心だにゃー」

土御門は普段の軽い顔のまま答える。
サングラスの奥の目には焦りが見えないでもない。

「一つだけハバネロ入りのガムをいれといたんだぜい。一つしか入
れてなかつたから安心してたにゃー。まさか一気に食べると思わな

「へつ！」

スタイルのひざが土御門の腹を直撃した。

「で、そろそろ限界なんだけど」

結局、二コチンを摂取していないスタイルは既に臨界点を突破していた。

スタイルは小さく手の平を差し出す。

「だ、大丈夫だにゃー。」こにあるぜよ

土御門がポケットから同じパッケージの箱が出てきた。
すぐさまそれを奪い取る。

「次はわざのよつなことは無いだろ？」

スタイルは訝しげに土御門を見た。

「この土御門元春、そこまで人の道を外れてはいないぜよ
「じゃあ、いただくよ」

スタイルが一つとつて口に含んで噛む。
スタイルは気持ちが少し落ち着いた。

（何で、土御門が二コチンガムなんて持つてるんだ？）

上条はその疑問をじりにか喉で止めた。

4話 タバコ（後書き）

微妙に伏線回収できたでしょうか。

元はといえば、この一口チンガムの件からこの話は構成されていったとしても過言ではありません。

ムチャクチャな進み方になる可能性もありますが、どうか最後まで見守つていただけるとありがたいです。

ご指摘、ご感想お待ちしています。

5話 曇休み（前書き）

今回は上條さん田線です。

5話 昼休み

四時間目の授業が終わり、昼休みの時間になつていた。

「捨井、土御門！一緒に弁と」

シスターさんの難から逃れたおかげを放り込んだ弁当を持って上条は振り返るが、そこには既に一人の姿は無かつた。

（仕方が無いか……）

上条は諦めて弁当箱のふたを開ける。

もともとスタイルは捜査のためにこの学校に来ているのだから、授業を受けてクラスにいることがイレギュラーだったわけだ。土御門も同じイギリス清教の魔術師であり、協力するのはいく当然のことだ。

部外者は上条のほう。

最初から関係なかつたわけだ。

しかしそこで納得して終わらないのが、上条の短所であり長所だった。

「なあ、この学校に魔術好きな奴とかいるか？」

上条は近くで固まつていた男子生徒の集団に話しかける。

男子生徒たちはキヨトンとした顔をした。

オカルト
非科学が日常から排除されている学園都市では普通の反応だ。

少しでもスタイルたちの役に立つ情報を、と上条は思ったわけだが……。

そんなにうまくいはずはないよな、と諦めかけた。しかし、男子生徒の一人が口を開く。

「えつと……アイツは確かにうのに興味あつたと思つ」

名前を思い出やつとしているらしいが、出でこない。

「ああ、一年の加東かとうだろ?」

他の男子生徒が言葉を引き継いだ。

「何か親が宗教やつてたらしくてや、学園都市来てからも信仰やめてないらしょよ」

「いっつでも続けるとか至難の業だよな。教会キリストとか、墓も無いの」

確かに学園都市で宗教をやるにはかなり無理がある。

踏み絵のようなものはないが、言つならば人々の視線が弾圧である。

冷たい目や白い目で見られる」とぐらには覚悟しなければいけない。

「そいつって三沢塾に通つてたりした?」

上条は質問を重ねる。

「多分。アイツの家、金持ちだからな」

「まあ、夏休みに潰れる前にもつ辞めてたらしいけど」

条件に当てはまる、と上条は思った。

魔術に手を出す可能性があり、元三沢塾生。

大前提是クリアしたが、全く別の疑問が生まれる。

「何でそんなに詳しいんだ？ クラスビックルか学年も違うのに」

上条が問うと、

「ああ、アイツ結構有名人だから」

「五月ぐらいに広告用の氣球撃ち落とそうとしたんだつけ？」

上条が知る由も無いことだが、そこそここの事件を起しているらしい。

「宣伝文句が宗教をバカにしてる、とかいつてたやつだろ？」「

「学園都市なんだから当たり前だよな」

もし「こいつがその魔術師もどきだとしたら事件を起こす可能性は十分にあるってことだ。

「でも、最近おとなしくなったよな……」

「確かに。アイツを追いかけた新聞部のやつが嘆いてたぜ」

（最近、おとなしくなった？）

魔術に手を出しつづけ、ほかに目を向ける余裕がなくなつたところとか。

確信に至るほどの情報ではないが、十分参考になる。

「そいつのフルネームは？」

「加東正だ」

「かとうまさ

(よし、スタイルに報告するか……)

食べかけの弁当を残したまま、上条は席を立つ。

「ありがとな」

「おひ、不幸運んでくるなよーー」

背中からかけられた言葉にガックリしながら上条は教室を出た。

5話 曇休み（後書き）

さらに犯人に近づきました。

一度全部消えてしまつたため、予定より短めになつています。

「指摘」、「感想」をお待ちしています。

上条が男子生徒から話を聞くのとほぼ時を同じくしてスタイルは職員室に来ていた。

「夜間入校の許可記録が見たい？」

スタイルの目の前の縁ジヤージの教師、黄泉川愛穂が不思議そうな声を上げる。

夜間入校というのは要するに能力の使い方を練習したい生徒のために夜、校庭や校舎を貸し出すことである。

声を操る能力者に音楽室を、運動機能を高める能力者に校庭やホールを。

そんな風に能力開発を支援する形で大抵の学校にある制度だ。しかし、寮の門限や生徒のやる気の問題でほとんど使われていないう�も多いく。

この学校は能力開発が盛んではないため、使っているのは一部の真面目な生徒か、もしくは悪いことを考えている生徒である。だから、スタイルはそれを見せてもらおうと考えた。

「何でそんなのが必要じゃんよ？」

黄泉川の質問にスタイルはすぐには答えれない。
捜査です、と言つ訳にもいかないので別の理由をでつち上げなければならぬ。

「あの、友達がちょっとものを無くして、それで、昨日の夕方まではちゃんとあつたらしくて、夜に誰かが盗つていったんじゃないかなって……」

スタイルははつきり言つて話術は苦手だ。

切り札の意味が『必ず殺す』であることからも分かるように話し合ひをするぐらいだつたら相手を燃やしている。

「何が無くなつたんじやん？」

黄泉川の追求は続く。

「きょ、教科書です……」

あわててスタイルは適当に答えた。

今日のスタイルにとつて一番身近だつたものだらうか。
とつせに出了たのはそんな言葉だつた。

「教科書を学校に置いてく輩で子萌先生のクラスつていつたら……
上条だろ?」

上条といつことにしておけば、色々と都合が良さうだとスタイルは考える。

「は、はい……」

詰まりながらもそつ返した。

「何で本人が来ないんじやん?」

まだ納得させられてはいないようだ。

黄泉川の質問は的を射ていて、言われてみれば当然の話だ。
この問い合わせに対する答えをスタイルは持ち合わせていない。

もどがでつち上げた話であり、上条と打ち合せをしたわけでもないからだ。

ガラツと後ろでドアが開き、救世主が現れた。

「カミ! やんなら購買で格闘中ぜよ」

サングラス姿の不良少年、土御門元春がそこにいた。

「上条ちゃんは弁当ではなかつたのですかー?」

隣で何となく話を聞いていたらしい子萌先生が口を挟む。その疑問もしつかりと矛盾を指摘していた。

「なんか、登校途中にひっくり返したらしい」「やーーー

土御門がそれだけ言つと、

「そういうことだつたですかー?」

「事情は分かつたじやん」

と場が一気に納得した。

スタイルは感心する。

幻想殺しの不幸体質に付属する妙な説得力を、最大限活用する土

御門元春にだ。

(さすが潜入のプロ、といったところか……)

スタイルが思いながら土御門に目線を向ける。

土御門は、これがスパイたる所以だにやー、とでも言いたげな眼

差しを返してきた。

「でも、教科書盗む奴なんていないと思ひません」

黄泉川が言った。

「僕もそう思います。でも、念のため確認しておきたいんです」

スタイルが言つて、さすがに黄泉川もおれたらしく書類を探しはじめた。

「あつたじやん。確かめてすぐ返すじやんよ」

黄泉川から資料を受け取ると、スタイルと土御門は田を通し始める。
出でぐる名前は大体バラバラでたまに土御門「元春の名前も見つけた。

気になるが、本題とは関係ないので無視する。

そして、気になる名前を見つける。

最近になつて急に夜間入校の回数が増え、ついでに土御門毎日夜間の学校を貸しきつている生徒の名を。

その名前は 加東正。

6話 職員室（後書き）

どうしても説明文が長くなってしまいます。
今回も全体としては短めになりました。
次回はバトルパートになるかもです。

「指摘」、「感想」をお待ちしています。

7話 フラグ（前書き）

バトルパートには入りませんでした。
今回は禁書の王道？みたいなものを田指しました。

（加東、正？ 確か……）

スタイルはポケットの書類、元三沢塾生のリストを取り出す。パラパラと四枚ほどめくると、そこにも『加東正』といつ名前があつた。

（やっぱり、コイツ……）

スタイルは書類の顔を見て思い出す。

一時間目の後の休み時間だ。

スタイルたちの後ろを逃げるように去つていった生徒。眼鏡をかけた少し太めの

その男が加東正だつた。

（盗み聞きされている可能性もある。急がないと……）

焦りを感じたスタイル。

「ありがとうございました」

夜間入校の許可記録を黄泉川に押し付けるよつて返した。

「もういいじゃんよ？」

はい、とスタイルは短く答え職員室から出でていく。長い髪を下ろした見覚えのある女性とスタイルはすれ違つた。

（う） ！ 今の世……いや、そんなはずはない。どうあえず、急げ

早足で廊下を歩くスタイルに土御門が続く。

「エンゲみたいだ」やー

土御門が周りを気にしない口調で言つた。

「そうみたいだ。暴走してなきゃいいが……」

言いながらスタイルは階段を上り始める。

「アリババ」、二〇一九年

階段の方から聞き覚えのある耳障りな声が聞こえたかと思うと一人の少年が転がり落ちてきた。

バン！ 落ちてきた少年とスタイルが団子になり、階段の一番下まで転がる。

かたや赤髪長身、かたやツンツン頭の少年は仲良く廊下にのびた。上条の上に折り重なつていたスタイルは服に付いたほこりをはらいながら無言ですぐに立ちあがる。

「不幸だ……」

スタイルに続き上条がお決まりの台詞を呴きながら起き上がった。

「すいません！ 大丈夫ですか？」

いかにもスポーツ少女らしい女の子が階段を駆け下りてやつてきた。

少女は立ち上がりて凜としているスタイルには目もくれず、上条へと駆け寄る。

「大変ー、ここ擦りむいでるー。」

上条の肘を見て少女が声を上げた。

その傷はかすかに血がにじんでいる程度だ。
ここ数ヶ月の間に上条がしてきた怪我に比べれば何てこと無いものだ。

「今すぐ保健室に行かないと……。ああ大丈夫ですかー？」

一人でパニック状態に陥る少女。

「いや、大丈夫」

上条は一言で優しく止めた。

「すいません。私がボールを落としたばかりに……」

少女は頭を深く下げ、申し訳無をしつこいくついていく。

「ぬう、カミちゃん。こんな切羽詰まつた状況でもフラグを立てるなんて……」

土御門が嘆いた。

「あ、スタイル！ 実は加東正っていう男が

「分かつてゐる」

上条が言い終わる前にスタイルが歩き出す。上条はキヨトンとした。

「今、そいつのところに向かってるとこなんだ」

とりあえずはその台詞で納得したらしい。階段を上るスタイルに上条がついてきた。さらにその後に土御門が続く。

「その加東正っていう奴、親が宗教やってて、魔術には少なからず興味があるって話だ」

上条が話しだした。

「かなり変わったやつでそこの名は知られてるらしい。少し前に飛行船を撃ち落とそうとしたとか言つてたな……」

上条が手に入れた情報を話しあげる。

「そうか。やはり、あいつが犯人で間違い無さそうだな

犯人といつてもまだ何もしていない。何かやらかす可能性があるというだけなのだが。

話しているうちに加東正がいるクラスの教室前に到着した。

7話 フラグ（後書き）

今回も短めです。

バトルパートに入りませんでした。

今回は禁書の王道？みたいなものを目指してみました。
多分失敗しましたが。

次回は確実にバトルパートに入ります。

「指摘」、「感想」をお待ちしています！

今日はバトルです。

スタイルは廊下を見回して、加東がいないのを確認すると、

「加東正さんはいますか？」

教室の入り口付近に立っている男子生徒に声をかけた。

「ん？ うわっ！ でっけえな……」

男子生徒はスタイルの身長に驚いてのけ反る。
すぐに状況を理解すると、

「加東なら多分いると思うぞ」

そういうて教室の中を向いた。

「加東！ 何かでつかい奴が呼んでるぞ！」

教室の奥の方の椅子に座っていた男がビクッと肩を震わせた。
少し太っていて、振り向いた顔にはメガネ。

彼が、加東正だ。

事件を起こしたという話を聞いていたのでもつとクラスには堂々
と居座つていていたんだと思っていた。

どうやら、宗教関連の話になると人が変わるタイプらしい。
ということは、やはり危険人物の素質は十分か。
おどおどしながらスタイルの方へ歩いてきた。

「すいません。少しお話したいことがあって……。場所を移しても

「うつても構わないでしょつか……」

スタイルが話している間も加東の田線は廊下や上条、壁と移り変わっている。

すると、唐突に土御門がスタイルの前に出た。

「昨日の夜の話を、聞きたいんだけどにゅー」

（土御門！？　じこで話してどうするんだ？）

スタイルは思考をめぐらせるが、答えは出ない。
人がたくさんいるところで騒ぎになつていい事はないはずだ。

「アンタ、昨日学校で何してた？」

（ば、馬鹿！）

「違うんだ。ちょっと教えてほ　」

スタイルが弁解を終える前に、加東は走り出す。
過ぎ去るときの田はおどおどした田ではなくつていた。

「くそっ！　何をやつてるんだ、土御門！？」

スタイルは土御門を怒鳴り、加東を追いかける。

「大丈夫なのか！？」

上条が後ろから声をかけてきた。

スタイルはそれを無視して、加東が上がった階段を続いて上がる。

「どけ！ 邪魔だ！」

加東が階段にいる生徒を押しのけながら進む。
おどおどした雰囲気は既に亡くなっていた。
きやつ！ と女子生徒が突き飛ばされる。
その女子生徒は上条に体当たりするようにぶつかった。
上条は全身を使って受け止めるが、耐え切れずに階段の下に落ちる。

加東が三階へ上がる。

スタイルは追いかけるが足がついていかない。

バスケの疲れだろうか。

加東は三階の廊下を突っ切つた。

どうやら次は下に降りるつもりらしい。

加東が降りようとする階段に土御門が立ちふさがっていた。

「屋上に追い込むぞ！」

土御門が加東にも聞こえるように叫ぶ。

加東はさらに慌てたようで判断力を失い、自ら屋上への階段を登りはじめた。

「来るな！」

加東が屋上のドアを開けながら、振り向いて怒鳴る。

勿論、スタイルも土御門もその程度では動じない。

バン！ と加東がドアを閉める。

スタイルが開けようとすると、向こう側から押さえつけているらしく開かない。

「どけ……」

見かねた土御門がスタイルに言うと、唐突に蹴った。
ボガン！ と大きな音がしてドアが開く。
ドアの向こう側では加東が吹き飛ばされて座り込んでいた。
ざつと見渡した感じ、屋上は荒れていた。
草がコンクリの隙間から生え、石がいくつも転がっている。
開けたドアを通り、二人は屋上に出た。

「何で逃げた？ 何があるんだろう？」

土御門が加東を追い詰める。

加東は座り込んだまま後ずさつて、右手で足元の石を一つ拾つた。

（加東の能力は……！）

スタイルは思い出し、嫌な予感を感じる。

「危ない！」

スタイルが土御門に叫ぶ。

土御門は気にする様子も無く加東に近づく。

加東はにやりと笑つてから右手を思いつきり振つた。
手から放たれた、「ただの石」、は恐ろしい速度で土御門の懷に向かう。

「ガツ！」

無防備な脇腹に石が当たつた。

土御門は激痛に顔を歪ませ、脇腹を抱え込む。

すかさず、加東が立ち上がり、右の拳で土御門の胸を打ち抜いた。土御門の体がスタイルの前まで飛ばされる。

スタイルは嫌な予感が現実になつたことを確認した。

加東正の能力は豪腕投法スロー・オーバーと呼ばれる。

簡単に言えば肩から腕にかけての筋力を強化する能力だ。しかし、強化されるのは筋力とそれを生み出す筋肉だけ。壁を思いつきり殴れば皮膚や骨には傷が付く。

関節がやられるかもしれない。

そういう危険性が少ないのが、投げる、という行為。

思えば、上条の言つていた飛行船を撃ち落とすという事件もこの能力を利用したものか。

「大丈夫か！？ 土御門！」

屋上の扉を次にくぐつたのは、上条当麻だった。

バトルのメインは次になりそうです。
昨日は更新できなくてすいません。

「」指摘、「」感想をお待ちしています。

9話 ハズレ（前書き）

少し間が空いてしまいました。
今回はメインバトルパートです。

開いた扉を通ってきたのは、上条当麻だった。

目の前に倒れる土御門を目にして上条の表情が変わる。

「テメエ、土御門に何をした！」

座り込んでいる加東をにらみつけながら、上条は怒りの声を上げた。

「気を付ける！ アイツは筋力を強化する能力者。そのみきて幻想殺しとは相性が悪いぞ！」

スタイルは上条に声をかける。
別に心配をしているわけではなく、戦力を存分に利用するためだ。
とスタイルは思っている。

「ふふふ」

不気味な笑いを浮かべる加東。

その手にはまだいくつかの石が握られている。

土御門への先制攻撃が見事に成功し、油断しているのか。

「だ、大丈夫だにゃー。 げほげほっ」

脇腹には切り傷、そして胸を殴られたときには肺や肋骨に大きな力がかかつただろう。

苦悶の表情をうかべながら土御門は立ち上がった。

既に土御門は加東を見据え、戦闘体勢に入っている。

「ひひひ」

加東はどこか高笑いのようでどこか引きつるように笑つた。
それが合図となつた。

上条が加東の正面から突っ込む。
ただ突っ込んだのではない。

夕詰 陽動た

しかし所詮は筋力の強化。

もとから掠るような軌道だつたため、上条は軽く右にステップを踏んで避けた。

手の届く距離まで近づいた上条を加東が右腕で迎え撃つ。速い拳だが、上条は上半身を振つて避けると右の拳を加東の顔面に向かつて打つた。

丁
雪
川

拳は途中で止められる。

止めたのは左腕。
こぶし

が、しかし、攻撃を止めたのは事実だ。

加東は空いている右腕で上条を殴る。

けれど、上条の左手に幻想殺しはない。

筋力強化によつて人間らしからぬパワーを得てゐる右の拳が上条

の腹を捉えた。

「がはつ！」

上条が吹き飛ぶ。

この一瞬を狙っていたのが土御門だ。

上条を殴り飛ばした余韻に浸る加東の後頭部に拳を打ち抜いた。ゴツと拳と頭部の衝突音がし、加東が前のめりになる。すかさず土御門が蹴りをくわえ、耐え切れずに加東は倒れた。両腕以外はただの人間。

それもどちらかというと運動不足だ。

倒れた加東は寝返りを打ち、土御門から後ずさる。

先ほどと同じ構図だが、土御門は加東が何かを投げることを警戒している。

下手を打つはずがなかつた。

加東はそれでもにやつと笑つた。

土御門が避けれる体勢をとる。

加東が投げた。

土御門は避けれなかつた。

ズサア！ と土御門が屋上の荒れたコンクリの上を滑る。さらには給水タンクの底あたりに頭をぶつけた。

加東が投げたのは上条。

両腕をいっぱいに使い、人を投げてきた。

思いつきり屈めば避けれないこともないが、避けたら上条は給水

タンクの硬い金属に一直線だ。

土御門は受け止めるしかなかつた。

「ふふつ、作戦勝ちかな」

気持ち悪い笑みを浮かべる顔。

「後はお前だけだよ……」

氣味の悪い言葉が発せられる。

「かかつてこい」

スタイルはポケットに突っ込んでいた手を引き抜いた。そして、小さな紙をばら撒く。それはただのノートの切れ端。

「ん？ 何このおもちゃ……。へへ、馬鹿にしないでよ」

加東はそう一蹴した。

それに対して、スタイルは無防備に歩いていく。走りもせず構えもせず、真っ直ぐ加東に向かって歩いた。加東は石を投げることなど考えもしない。ただ歩いてくるだけの人間にわざわざ物を使う必要がない。拳で迎え撃てば良いだけの話だ。眼前に迫ったスタイルに右手を繰り出す。完全に顔面を捉えるコース。

（決まつた……！）

加東は既にそう確信していた。しかし、加東の拳は空を切る。目の前にあつたはずのスタイルの像がぶれた。いたはずなのに、いない。しかも頬の横から急に何かがぶつかってきた。

痛みの感じからして殴られたような感じだ。
理解不能な状況に冷静さを失う。

「「Jのちだ」

不意に後ろから声がして、加東は振り向いた。
誰もいない。

慌てて、周りを警戒しようとした頃に背後から蹴りが入る。
倒れそうな体を起こして振り返ったときにはスタイルは数m先に
いた。

「「Jの野郎あおおお」」

叫びながら殴りかかるとすると足をかけられて転ぶ。

「「つーー」」

殴りうとする不自然な体勢で倒されたため、手を付くまでの暇す
らない。

地面に無様に転がった。

仰向けになり、起き上がるといふとすると、スタイルが現れた。
その手には炎の剣。
自分の首元まで伸びている。

「動いたら殺す」

スタイルの有無を言わせぬ言葉に加東の思考は混乱した。

「昨日の夜、何をしていたか白状しろ」

そう突きつけられた。

スタイルは蜃氣楼を使った。

ノートの切れ端にシャーペンの文字。
おそらくこの世で一番簡略化されたルーンのカードを使って。
いるように見える場所には常にいない。
そうするだけで加東を手玉に取ることが出来た。

そして、今、少ない魔力を絞つて作られた炎剣を突きつけている。
後は加東の自白のみ。

これで事件は解決する。

本当の任務は『限りなく疑わしい人物を見つけ出し、報告する』
というものだ。

しかし、それ以上のことをやれば文句は言われないだろう。

「さあ、言え」

鋭い目つきを威圧するようにあびせかける。

「……ません」

加東が小さく呟いた。

「はつきり言え」

スタイルは炎剣の先に集中する。
刺してしまってもいけないし、有事の際には即刺さなければなら
ない。

加東の顔に汗が垂れていくのが見える。

「盗撮をしてすいません……」

上半身だけ起き上がりさせた体勢から力が抜け、加東は地面にのびた。

「もう一度言つてみる」

スタイルは理解できない思考を抱えながら加東に命令する。

「盗撮をして……すいません……」

搾り出すように加東が再び言つた。

スタイルは状況を理解する。

と、同時に怒りが湧き上がつた。

結論を間違えていた自分と価値の無い答えを用意していた加東に對しての怒りが。

スタイルは炎剣を突きつけるのをやめた。

「歯を、食いしばれ」

スタイルの拳がコンクリの上の加東の頭にクリーンヒットする。

丁度、そんなときだった。

騒ぎを聞きつけた先生が屋上に来たのは……。

9話 ハズレ（後書き）

説教フラグです

この小説でははじめてのバトルシーンだったと思いますが、どうだつたでしょうか？

敵が弱いって言うのと、スタイルが強いっていうのがあって後半は一方的になつてしましました。

堅いと書きにくいかな、と思いますので、感想下さい！

後、評価などもいただけたら嬉しいです！

10話 指導室（前書き）

2・3日に一回、自分は何を持つてそんなことを言つたんでしょうね。

一週間に一回がいいところです。

今回は第一のバトルの事後処理です。

「全く……転校初日に乱闘騒ぎなんて前代未聞じゃん
「学校生活は集団での行動を学ぶ場ですよ。周りに暴力を振るつたり、ましてや上の学年に喧嘩を仕掛けるなんて 捨井ちゃん、聞いてるんですかー？」

ふてくされたように俯いたスタイルの顔の前で小学生サイズの先生、子萌がぶんぶん手を振つてアピールした。

対してスタイルは『僕は無罪ですから』というように応じない。ちなみにスタイルの両側には体に軽く包帯を巻いた上条と土御門が同じくふてくされたように座つている。

「上条さんは巻き込まれただけでせりへ……」
「…………、」

という感じで二人とも話を聞こうとはしていない。
三人が進路指導室に閉じ込められてから、かれこれ1時間ぐらい経つたような感じだ。

途中で他の先生が一度入つてきたり、何か報告をして出て行つた。もうそろそろ5時間目が終わつていそうな時間だ。

先生も先生で、

「大体、黄泉川先生が夜間入校の許可記録なんて見せるからこうなつたんですよー」

「何でじゃん。子萌先生だつて納得してたじやんよ」
などと内輪もめを始めている。

スタイルは一人で考え始めた。

（加東正はエセ魔術師ではなかつた。となると、必然的に他の誰かがそうなる訳だが、一体誰だ？）

加東正ほど条件に合致した人物はいない。

魔術への興味、三沢塾への加入、夜間の入校。三つ全て合わせればとことん犯人像に近い。

（夜間に学校に入つたのは盗撮用のカメラを仕掛けるため……。ふざけた理由だがそれが事実なのだつたら仕方が無い。ただ、そのためだけと言えるか？）

スタイルはとりあえず先生たちへの質問が浮かんだ。

「あのー頬のつねりあいをしているところ悪いんですが、加東正の言つていたカメラは見つかつたんですか？」

へ？ と二人の先生は互いの頬を持つたままこちらを向く。

あーあーカメラのことですか……、と子萌がさつき入つてきた先生から受け取つた資料をじちゃじちゃし始めた。

横から黄泉川が『そんなの見せたらまた何か問題起こすじゃんよ』と耳打ちする。

立派に問題児認定されたな、とスタイルは心の中で嘆息した。

「こういふのは見せておかないと後から逆に面倒くさいものなのですよー」「そりや問題児の扱いに慣れてんのは子萌先生じゃんよ。けど、子萌先生のクラスで問題が起こつてているのも事実じゃん」「せんせーのクラスは問題児じやありません。元気があふれてるだけ

です」

繰り広げられるスタイルの知識の及ばない会話。

いつまで聞いていてもスタイルには何も生まれない。

「カメラの話ですけど……」

そうでしたねー、と子萌先生が紙を取り出す。

「まだ全部とは限りませんけど……」

そういうて差し出された紙には学校の見取り図が書かれていた。その上に監視カメラが会った場所には小さなシールを張っている。大体は女子トイレや更衣室、あからさまに欲望丸出しな場所だ。しかし、比較的入り口付近が多いような気がした。そしていくつか不自然なものを見つける。

（……なんでここは廊下についているんだ？）

スタイルが気になつたのは一階の廊下の両端だ。

欲望丸出しな部分以外で廊下などについているのはそこだけだ。

（むしる、ここが本命か？）

スタイルにはそう思えた。

他の監視カメラと違いここだけは目的が分からぬ。

盗撮、という趣旨にあつた目的が。

つまりは、ここに限つては、別の目的があるということか。

例えば、一階の教室で儀式の真似事をする際、見回りなどに見つからぬようにするために。

もしくはその一つを誤魔化すために他の数十個を付けたのか。
何はともあれ、加東にはまだ聞くことがある。

「先生、加東は今どうしてますか！？」

突然の質問に首をかしげる両先生。

「加東なら一通り尋問したあと病院にいつたじやん」
「捨井ちゃんがやりすぎましたからねー」

苦笑いする先生達を見てスタイルは焦る。

（まだあいつが犯人じゃないという証拠は無い）

椅子からバツと立ち上がると一人の先生の制止を振り切り、進路指導室を出て行つた。

その後、残つた二人がさらに厳しい説教を受けたことをスタイルは知らない。

今回は微妙だったです。

感想、お願いします！

1-1話 優しさ（前書き）

1年5ヶ月ぶりに「さんちば」。

必ず元気でいてみせますのでよろしくお願いします。

1-1話 優しさ

捨井　スタイル　が、病院に向かった（と云々られてくる）加東を追っている頃。

上条と土御門がいる教室では6時間田の授業が始まっていた。

「す、捨井ちゃんは早退なのですよー。理由はプライバシーに関するので言えないのですー」

教壇では田詠が多少おどおどしながら報告する。
とはいっても、三馬鹿効果で、こういったトラブルに慣れているのか、心底動搖している様子は無い。
そして、生徒達もそういうことに耐性があるのだろう。特に不審に思う様子は無かった。

「6時間田は自習なのですー」

との合図で恐ろしいぐらいの騒がしさが教室に広がる。
こつものじとことえぱいつものことなのだが、それを統率するはずの教師、田詠と、委員長的立ち位置にいる吹崎は軽く頭を抱えている。

しかし、特に注意するでも止めるでもなく、そのまま授業は続いてこきそりだつた。

「なあ土御門、スタイルは大丈夫なのか？」

「なうに、カミやん。あれだけ武器の少ない状態でも能力者に勝つたんだにゃー。そいつらへの能力者に負けるはずがないぜい」

土御門は白い折り紙に青いインクで色を付けながら言つ。

上条は、不安げな目で、

「いや、やうじやなくてさ、街の中で戦い始めたりしないかと思つてさ」

「……ありえない、ところの確証はないにやー。けど、スタイルの任務は犯人を見つけて報告するだけのはずだぜい」

「だったら余計危ねえじやねえか！ セツキは戦つちまつたんだぜ？」

「危ない、かもにやー」

土御門は笑つてゐる。不安要素を口にしながらも、そんなものは不要だと言つたげだ。

同じ組織に属する信頼感か安心感か。

「けど、心配は要らないぜい。なんだかんだ言つて、スタイルは優しいからにやー」

上条は、土御門の言葉に素直に同意した。

スタイルが見せる冷徹さや残酷さは、全てインデックスへの優しさの裏返しなのだ。

街中で戦闘を行うことは、インデックスを描いてしまう危険につながる。

そんなことはしない、と上条は結論付けることが出来た。

一方、その頃、スタイルは……。

「まったく、どこに行つたんだ！」

ステイルも全く見当を付けずに動いているわけではなかつたが、何せ、街は広い。

人払いのローンなどを使えば、多少は相手の行動を誘導することは出来るが、あいにくと取り上げられている。

元々、潜入捜査と言うだけあり、隠密行動で犯人を確かめ、報告するのが仕事だった。

だから当然、街へ繰り出して犯人らしき人物を追うことなど想定外だつたのだ。

しかし、悪事がバレそうになつたときに、あのよつな臆病な者がどうするかは大抵決まつていて、隠蔽するために策を講じることだ。

証拠を捨てに行く、目撃者を殺す、などだ。

この場合、既に盗撮事件は発覚している。

と、なれば、それとは違う別の事件を隠そつとするはずだ。

証拠を消す、ということは、その場面には証拠がある、ということでもある。

けれど、その場を逃せば一度と証拠はつかめないかもしれない。

「まだ5分も経つてないはずだろ？……」

5分あれば相当な距離を移動できるかもしれない。

しかし、加東は怪我をしている。

他でもない、実際にその怪我を負わせたステイルが知らないはずもない。

そういう距離を稼ぐことはできないはずだ。

「クソ……どこにいるんだ！」

黄泉川は『加東は病院に行つた』と言つていた。

何をもつてそう判断したのだろうか。

本人の言葉？あの教師は人がよさそうではあるが、それゆえに甘い行動は取らないはずだ。

盗撮事件の犯人で、まだまだ事情を訊くべき相手を釈放するのだから、自己申告を信じるようなことはしないはずだ。

（……車？いや、学園都市では、その可能性は低い。大体、運転する側の人間がいない）

（バス！ そうか、バスだ。病院方面のバスに乗つて途中下車すれば……）

スタイルは携帯を開き、第七学区内の病院の位置を検索する。

一番近いのは、やはり上条が何度も世話になつているあの病院だ。スタイルも行つたことがある。

高校から病院へまつすぐつなぐバスの路線で、時間を考慮すると……。

1時15分発の無人バスへ乗つたはずだ。

途中下車できる駅は2つあるが、そのうち一つの駅は別の高校の前だ。

人目が多く、証拠隠滅には適さないだろう。

といふことは、もう一つの、学生寮の前のバス停だと考へるのが自然だ。

昼過ぎの時間帯に、ほとんど人はいなはずだ。

町で騒ぎを起こされると、かなり面倒なことになる。

インデックスが異変に気付いて事件に関わってくるのかもしれな

いのだ。

それは、スタイルとしては何としても避けないと云うこと。
スタイルはずっとそのために戦つてきたのだから。

(急げ！ 時間はないぞ)

自分に言い聞かせ、スタイルは走る向きを変えた。

11話 優しさ（後書き）

次回も近日更新予定です。

感想、レビュー、評価、お願いします！

12話 バス停（前書き）

どうも。

一時期のような更新ペースを維持したいです。

12話 バス停

ステイルは学生寮の前のバス停までやつてきた。

路地をショートカットしてきたので、バスの到着予定時間まで後2分ほどあるはずだ。

「はあ……はあ……」

呼吸が落ち着かない。

大量に魔力を精製するステイルは、比較的体が弱い。

普段はそこを魔術でカバーするのだが、魔術的な補助がない今では長距離を走ることはあまり得策ではなかつたのだ。

もともと、学校内での調査を主としていたがために起きたことだ。戦闘を行つた時点で既にかなり危ういのだ。

だから、これからはなるべく穩便に済ませなければならない。

バスがこちらへ走つてきた。

乗客があの男しかいなかつたら、前のようにバスごと吹き飛ばすことも考えたが、どうやら他にも数人乗つているようだ。

スタイルがいるのだから、あのバスはここで止まるだろう。

バスに乗り込んで引きずり出してやろう。盗撮事件の犯人だとうことを明示しながら行えば、通報されるようなことはないだろう。

バスが止まる。

ドアが開いた瞬間にステイルは乗り込んだ。バスの中をざつと見回して……困惑する。

いない。

特徴がない男とはいえ、さきほど殺しかけた人間だ。そうすぐに忘れまい。

それに、そもそもこのバスには女子生徒と教師らしき大人しかいないのだ。

（ 駄目だッ！）

閉まるうとするドアに手をかざし、安全装置として止まつた扉を押し開けバスを降りた。

ステイルの後ろで扉は閉まり、すぐに発進した。

このバスではなかつたのか？

他の病院に行つた可能性も考えられるか……？

考えられないことはない。けれど、不自然だ。

大きな怪我でなかつた以上、専門的な治療が必要な場面ではない。どの病院でも間に合うレベルの怪我で、近くない病院を選ぶことは、怪しまれる。

歩きで行くのはより不自然。

（何か、何か見落としているんだ……）

一つ目の駅で降りないと考えた理由は、人の多さだ。

人が多い場所では証拠を消し去るのが難しい、と。

この推測 자체が間違いで、人が多くても難なく証拠隠滅が可能なのかもしれない。

しかし、それならば高校を出る必要はなかつた。

怪我はたいしたことないと言つて、学校内で処分すればよかつたのだ。

盗撮事件の犯人として注目されているから難しいと考えたのか？

(違ひ。……もつと根本的なところだ)

そもそも証拠を消すことが目的じゃないとすれば？

話は大きく変わってくる。

臆病者が行う行動。

事件を隠蔽する……いや、それだけじゃない。

(仲間……。そうだ、あいつは仲間に助けを求めるにいったんだ)

加東が盗撮を行っていることが判明した時点で、他に魔術を行使した人間がいるという話になつた。

そして、加東が単なる盗撮犯ではないと分かり、やはり加東が事件に関与していると結論付けた。

けれど、複数の人間が関与している可能性はまったく否定できな
い。

単独犯だと決め付けていたが、先入観に過ぎなかつたのだ。

(となると……クソッ！ 前のバス停は高校前だ！)

その高校に仲間がいるのかはわからないが、加東が降りた場所に見当がついただけでも僥倖だ。

(しかしこのままだと……、)

仲間と合流されると面倒だ。

やけになつて問題を起こされると困るのだ。

ｐrrrrr……携帯が鳴つた。

着信は、土御門からだ。

「どうしたんだ？」

『授業が終わった。人はすぐにいなくなる。その後、魔術の痕跡が残つてゐる場所を探す。戻つてくれ』

「今はそれどうじや……！ 加東には仲間がいたかもしないんだ！」

『……仲間』

「加東は病院に向かうバスを途中で降りた。降りたバス停はおそらく高校の前だ。協力者がその高校にいるかもしだい」

『その高校つてのは？』

「ちょっと待つてくれ」

スタイルは携帯を開き、バスルートの地図から学校の名前を確認した。

「……ッ！？」

『どうした』

土御門の声が響く。

「……僕が通つてたことになつてゐる学校だよ

『……おい、それって……』

「ああ、東京上機学園の第七学区分校だ……」

12話 バス停（後書き）

どうも、「都合主義のオリ設定が少し入ってきますが、すいません。

長点上機の生徒って思いの外、出てこないですよね。

感想、レビュー、評価、お願いします。

13話 一人目（前書き）

「いつも、 こんなばんば。

後4回ぐらいでおしまいだと思します。

13話 一人目

帰り道。

上条と土御門と青髪ピアスが並んで歩いている。

「臨時の体育教師……あれは逸材や…」

「何のだよ……」

「黒髪ロングでお姉さん系のボンツキュツボンツ」

「……お姉さん系?」

「年は……20代の後半つていうといひやけど、黄泉川センセーにも劣らないあのスタイルは……んー！ たまらんでえ～」

ひとしきり一人で盛り上がった青髪は、パン屋の手伝いがあるとかどうとかで一人帰つていつてしまつた。

「スタイルはいないけど、大丈夫なのか?」

二人になつたので、名前を気にせずに上条は土御門に問う。

「大丈夫だにゃー。どうせ、校舎内を調査してそれで終わりだと思
うぜよ」

「さつさつ走つて出て行つたけど……。といひか、普通に話している
けど、俺は部外者じやなかつたのか?」

「教えなくとも首を突つ込んでくるんだからどうせひたすら同じなん
だぜい」

「ま、まあ、そうかも知んないけど……」

「問い合わせられて鬱陶しいだけなんだしにゃー」

「あのお、今日の前半から思つてたんだけども、土御門さんの中でも
私はどうこう存在なんでせう?」

上条の渾身のツツ「ミミ」が炸裂する。

「そんなことはどうでもいいんだにゃー」

軽くスルーされた。

「いつの間にかだけど、こんな道に来てたらやばくないか?」

一人がいるのは、第七学区のケンカ通り。

スキルアウトが多く、一般の学生が通るには多分に危険な場所だ。

そんなところで上条当麻、いつもの不幸スキルが発動した。落ちている空き缶の上に足が乗る。

スルツと滑つて前のめりに倒れ、ドンと人にぶつかつた。上条が倒れ掛かったのは、分かりやすい非行少年、もといスキルアウトの集団だった。

「おい、派手にぶつ倒れてきちゃって。ケンカ売つてんのか?」

集団の一人がいかにもな台詞を吐いてくる。

「いやいや、上条さんはそんな無礼はいたしませんよ?」

「上条つていうのか。じゃあ、ちょっとこいつちまで来てもらおうか、上条さん」

上条は最後の望みを隣の土御門に託す。

土御門がいるはずの場所には誰もいなかつた。

「カミayan、せいぜい頑張るんだにゃー」

と路地裏の方から声だけが聞こえた。

そちらの方向を見ると、土御門がニヤッと意味深に小さな笑みを残して去っていった。

「不幸だあああああああああ！」

「うなれば逃げるが勝ちだと思つて、上条はスキルアウトの集団に背を向けて走り出す。

「おら！ 待てやーー！」

長点上機学園。

学園都市の五本指に數えられ、能力開発においてトップを誇る学校だ。

しかし、能力以外に突出した一芸があればやつていけると言われ、『設定としての便利さから』 捨井 スタイル が通つていたことにした学校だ。

勿論書類上、建前上の話なので、スタイルは長点上機学園については一般の学園都市住人レベルにしか知らない。

長点上機学園は、その多様性から、本校だけでは行えないことを別の学区に分校をつくることで補完している。

その一つが第七学区にある。

加東の仲間は、その学校に通っているのか？

スタイルは学校前まで戻つてきていた。
長点上機学園前のバス停を経由してきたものの、加東を見つける
ことはできなかつた。

いずれにしろ証拠は学校に残つてゐるのだ。
犯人は現場に戻るとも言つし、加東の行き先が分からなくなつた
以上、下手に動くのはよいことではない。

学校は既に放課後。

テストが間近に迫つてゐるため、部活で残つてゐる生徒はいな
い。

（土御門は上条たちを引き離すと言つていたな……）

とりあえずは一人で調査するしかない。

人があふれている昼間では難しいが、この時間帯ならわずかな魔
力の痕跡を探すこともできる。

スタイルは先ほど見せられた盗撮カメラの場所を思い出す。
普段使われない校舎の、二階の廊下の端に、不自然なカメラがあ
つたはずだ。

おそらく、目的は盗撮ではなく監視。

そのあたりが怪しい。

見当をつけたスタイルだつたが、

「血？」

よくみると、それは血の跡だった。

(まさか……！？)

スタイルは土御門の例を見て知っていた。
能力者が魔術を使つた場合の副作用を……。

「クソツ！」

スタイルは血の跡を追う。

血の跡はあまり使われていなさそうな校舎の方へ繋がつていた。

(加東一人か……。それとも協力者のほうか?)

ついに血の跡は一つの教室に辿り着く。

スタイルはガラツとドアを開けた。

教室のほぼ中心にはこちらに背を向けて一人の少年が天上を見上げるよう立つていた。

(加東じゃない)

スタイルに気づいたのか、その少年の首がグリッと回る。

「ここにちは」

よく見ると、その部屋は血に染まっていた。

けれど、その血は声の主のものではないようだった。
声の主である少年の足元には、一体の赤い何か。

よく見ると……加東だ。

血まみれになつた加東が、少年の足元に転がつているのだ。
そのアブノーマルな風景に武器を持たないスタイルは身構える。

「君を血祭りに上げたいんだけど、別にいいよね？」

華奢そつな少年は、スタイルをにやりと見ると、

「勿論、答えは聞いてないけど」

13話 一人目（後書き）

こつから先は怒涛のバトルパート！

となる予定です。

感想、レビュー、評価、お願いします。

14話 放課後（前書き）

「んばんは。

バトルパートに入りました。

14話 放課後

「はあはあ……」

上条はどつにかスキルアワーの集団をまくことに成功した。息も切れて、家からの距離も遠くなってしまっている。田は既に傾いていて、少しづつ赤い色がかってきていた。

（帰るにしても、時間が時間だしな。何か買ってかなないとインデックスが……）

家で待ち受けける預貸モンスターのJETを想いでビビり寄りうとれる上条。
インデックス

（待てよ。財布は……？）

上条はポケットの中を探る。

しかし、財布の感触はどのポケットからも見つからない。

（ふ、不幸だ……）

家に忘れてきたのか、走って逃げる途中に落としたのか。

上条はとりあえず、とぼとぼと家の方角へ歩き出した。しかし、上条は気が付く。

（学校まではの方が距離が近い）

じ。

そういえば、と上条は思い出す。

学校に置いてある教科書類の中に虎の子の千円札があることを。

（よし、一度学校に戻るか……）

上条は学校の方向へと足を向けていた。

「勿論、答えは聞いてないけど」

少年が放つ言葉にスタイルはふつと鼻で笑う。
どうやらこいつが加東の協力者だったようだ。
いや、こちらが真犯人（くわまく）だつたと見るのが自然か。

加東の性格として、何かを主導するタイプには見えない。

加東は大きく怪我をしている。

魔術を使った副作用か、それとも仲間割れか何かか。
救急車を呼ぶべきなのかもしれないが、それが魔術に関するもの
なら、迂闊に学園都市の機関に引き渡すわけにも行くまい。
とりあえずはこの少年を取り押さえるのが先決だ。

スタイルの田線に気付いたのか、少年は足元の加東に田をやる。

「ああ、これ？　へまをやらかしたからね。お仕置きしてやつたんだよ」

なんでもないことのように言い捨てて、少年は力の抜けきった加東の体を蹴る。

少年は大口を叩いていたが、所詮はエセ魔術師。魔術が制限されているスタイルでも障害になるとは思えなかつた。

「じゃあ、行くよ？」

宣言と共に、

少年がスタイルの方へ手をかざす。

パリーン！ とスタイルの横でガラスが割れた。

廊下と教室に面するガラスは吹き飛ばされ、廊下側へガラスの破片が飛び散る。

スタイルは攻撃を目で捉えることができなかつた。

「うーん。うまく行かないな……」

少年が再度手をかざす。

スタイルは反射的にかがんだ。

バゴツ！ とスタイルの背後の廊下の壁が削れる。

「……ツ！」

スタイルは歯噛みする。

高校への潜入というイレギュラーな事情のためにスタイルは普段と装備が格違つた。

魔術を補助するための刺青や服装が無いため、スタイルの魔術は

威力が乏しい。

さらにルーンのカードなども全て置いていかされたために魔女狩イノケン
ティウスティウスの王を召喚する」こともできない。

「へへへ、まだ終わりじゃないよ」

少年が手をかざす。

スタイルは反応できなかつた。
すると、耳の横をビヒュッという風切り音が通り抜ける。
またしても廊下の壁がえぐられる。

(あいつの魔術は、風?)

スタイルはそう推測する。

コンクリの壁をえぐるほどの風となると相当危険なものだ。
しかし、わずかに救いなのは、精度が低いことと軌道が手の向き
から読めることだ。

「行つくよ~」

少年が手をかざす。

スタイルは教室の外側へ走つて逃げた。
教室の前を通り過ぎるように移動するとそれに合わせるようにガ
ラスが次々と破壊されていく。
スタイルに続いて少年も教室へと出でた。

「鬼ごっこだね?」

少年はスタイルを追いかけながら手を突き出す。
風の塊が打ち出されたはずだ。

ステイルは上半身を動かすことでそれを避ける。
バランスを崩したステイルの足元に再び風の塊を放つ。

「ぐつ！」

足に風の塊を受けてステイルは廊下を転がる。

一、三回体を打ち付けたステイルはその場で立ち上がれなくなつた。

慣れない服装、相当量の運動。

既にステイルの体は疲れきっていた。

「へへへ」

少年が歩いて近づいてくる。

少年は笑いながら、左手でステイルの襟首をつかんで持ち上がた。
その華奢な左手のどこに、長身のステイルを持ち上げる力があるのか。

そして、ステイルの腹の真ん中に腕をつける。
そこから風の塊が打ち出される。

「ゴハツー！」

スタイルの肺から空気が吐き出される。

少年は既に手を離していて、そのままスタイルの体はノーバウンドで10mほど吹き飛ぶ。

ついに廊下の端まで達し、スタイルは突き当たりの部屋のドアに激突する。

「もう終わり？ つまんないの

少年が再び笑つて近づいてくる。

スタイルの思考はまともに働いていない。

肋骨も何本かいかれただろう。

腸か肺も潰れたかもしれない。

スタイルの4mほど前で少年は立ち止まり、ゆっくりと手をがさした。

風の塊が打ち出され、

スタイルの頭部へまっすぐ軌道を描く。

しかし、

その攻撃は届かない。

小さな黒い鶴の折り紙が小さくはばたいて飛んできて、風の塊の軌道へ入った。

風の塊と衝突した折り紙は大きく爆散する。

「土御門さんの登場だぜい」

階段を上つて金髪とサングラスとアロハシャツの高校生が現れる。青い折鶴をスタイルに無造作に投げる。

「一青キ色ハ水ノ象徴。其ノ恵ミヲ以テ傷ヲ癒セ『さつさとう』」
クソヤロウ。なにもできないバカにちょっとしたプレゼントだ』

「

スタイルの体がいくらか楽になつた。
土御門がこちらに歩み寄ってきた。

「ちょっと痛むわ」

かがみこんだ土御門はスタイルの日の下の皮膚をつかむと一気に引き剥がす。

「痛つ！」

少し血が流れるが、その下にもきちんとした皮膚。

そこにはバー・コードのような刺青がある。

無論、そこには魔術的な効果が付与されている。

「これで少しばれるだろ」^{うへ}。

「ああ、すまない」

二人は立ち上がった。

「何々？ 君も僕と遊んでくれるの？」

放課後。

誰もいない廊下で。

二人の魔術師と一人のエセ魔術師が対峙する。

14話 放課後（後書き）

こつからラストスパートになります、多分。
感想、レビュー、評価、お願いします。

15話 魔術師（前書き）

バトルパート続きです。

「じゃあ、遊ぼうよ」

少年のかざした腕から風の塊が打ち出された。

土御門は斜めに駆け出し、相手との距離を詰めるところでその攻撃を避ける。

「やられっぱなしは性に合わないんだ！」

スタイルが右手を振るつと、ボハツと炎剣が伸びた。

「最初に言つておくが、あいつの使つているのは、魔術じゃない」

へ？ とスタイルは首をかしげる。

「あれはあいつの能力だ」

言いながらも、土御門は少年に接近する。

少年は次々と風の塊を打ち出す。

が、土御門のすばやい動きに対応できない。

狭い廊下を利用し、壁による急激な方向転換を行つからだ。

「くつ……」

土御門の右の拳が突き出された。

少年は顔の前で腕を盾にする。

しかし、土御門の拳は少年の腕の少し下の胸につけられた。

「ぐはっー。」

少年はバランスを崩して後退した。

そこに土御門はさらに蹴りを放とうとするが、

少年は両手を突き出す。

「！？」

土御門が対応する前に二つの風の塊が打ち出された。どうにか体をねじり、直撃を避けるが、一つが肩に当たる。不自然な回転のかかつた状態で土御門の体が空中を舞つた。ドサッと、土御門はそのまま廊下の床に激突する。

「へへっ」

倒れる土御門の体を飛び越え、スタイルが突進する。

放たれる風の塊は炎剣によつて断ち切られた。

炎剣の放つ高温が異常な上昇気流をつくり風は上方に向転を捻じ曲げられるのだ。

無防備な少年の肩に炎が襲い掛かる。

ふつ、と少年は小さく笑い、
胸の前で十字を切る。

カーン！ と炎剣の動きが止まつた。

炎剣と少年の間にあるのは見えない障壁。小さな結界だった。

土御門は動搖を隠せなかつた。

わずかな魔術を偶然生み出しただけのはずの少年がしつかりとした防御魔術を使った。

それも、十字を切る、という最も簡単な偶像崇拜の理論を使って。魔術師の優劣は派手さで決まるわけではない。

どれだけ強力な魔術を使えたとしても使う前にばれて避けられるのでは意味がない。

だから、一瞬で技を出せる、というのは優秀な魔術師の一つの特徴である。

しかし、彼はそれを行つた。ただの、能力者の少年である彼が。

「ふふつ。知つてる？ これ、あいつが通つてる塾で知つたんだよ」

あいつとは、おそらく先ほどの教室で倒れている加東のことだろう。

口ぶりからして、少年自身は三沢塾の元生徒ではないといふことだ。

しかし、加東も夏休み前には塾をやめている。では、

「どうやつて？」

スタイルが疑問を発する。

「え？ 簡単なことだよ。ただの盗聴器だ」

土御門は苦笑いを浮かべた。

超能力を使つた様々な可能性を考えたにもかかわらずその結果はこれだ。

先端科学を使った学園都市からしたら古典的にも程がある方法、

盗聴器。

アウレオルスは科学の素人だ。

ただの盗聴器、それさえも防げないほどに。

そもそもアウレオルスは詰めが甘かつた。
魔術を外に漏らさないように気を遣いすぎて、逆に怪しくなつて
いたように。

ステイルが左手から炎剣を生み出す。
それを少年の腹につきたてようとすると、

結界が決壊する。

魔力の破片が少年の前方へと撒き散らされた。
多数の欠片はステイルに突き刺さつた。

痛みに体のバランスを失い、地面に崩れ落ちた。

さらにステイルをすり抜けた結界の残骸は床や壁でバウンドする
と次は土御門を襲う。

「ガツ！ ガアアアアア！」

細長い廊下を苦痛の叫びがこだまする。

倒れているステイルを少年が思いつきり蹴り上げる。
土御門の倒れる場所の近くまで転がつた。

結界の残骸は全て消失した。

しかし、破片の刺さつた傷が消えることは無い。
ダラダラと血が流れた。

白い床へと赤い液体が零れ落ちる。

計算外。

それ以前に計算に必要な情報が足りなさすぎた。

元三沢塾生でもなければエセ魔術師でもない。

聞きかじつただけの情報でこの少年は既に“魔術師”の域に到達していた。

『天賦の才』。

そんな言葉を信じたくなる。

頭が良い訳でもなく、猛勉強したわけでもなく、いい師がいただけでもなく。

ただ、素で“魔術”を理解できる人間。

少年はそんな人間だった。

少年はゆっくりと歩を進める。

敗北の足音が一步一歩近づいている気がした。

土御門もスタイルも、何も出来ない。

ゴボツと赤い塊が口の端からこぼれた。

それはスタイルの口からではない。

土御門の口からでもない。

「は……？」

ガホツと咳き込むのは少年。

「ははっ。何これ？」

左手の甲で血の塊を拭いながらも、少年の顔は苦痛に歪む。

「痛い。痛いよ。うう……、アアアアアアアア！」

幻覚でも振り払うかのように少年が顔の前で十字を切った。現れた小さな四角い結界をおもむろに右手でつかんで、一人に向かって投げる。

「土御門！！」

息を切らして階段から上がってきた人影が割つてはいる。その人影は反射的に右手を伸ばすと、飛んでくる結界を掴んだ。ピキィィィィン！ という音と共に結界は消滅した。

15話 魔術師（後書き）

後一回の予定です。

16話 魔法陣（前書き）

バトルパートはこれで終わりです。

人影はツンツン頭の少年。
上条当麻だつた。

「誰？ これ以上僕の世界を壊さないでよー。」

少年が叫ぶ。

「すまないにゃー。カミやん。結局迷惑かけちまつたぜい」

ゴホッガホッと土御門は咳き込んだ。

受け止めた右手の平には赤い血の塊が落ちる。

「そんなことはいい！ 大丈夫なのか？ あいつは誰だ！？」

「あいつが例のターゲットだ。気を付ける。あいつは風の能力も使う」

上条はそれを聞くと少年へと目線を移した。

少年はアアアアアアアアと叫びながら、風の塊を乱射している。

しかし、狙いはめちゃくちゃで自分の真横に近い壁に当たつているだけだった。

白い壁は砕け粉塵を撒き散らしていた。

「スタイル！ お前は大丈夫か？」

「心配してる暇があつたら、さつさとあいつを倒してきてくれないか」

顔を歪ませながらも生意気な口を利くスタイルを見て、上条は安

心する。

卷之三

上条は床を蹴つて走り出す。

少年はヒツヒツと短い悲鳴を上げて風の塊を打ち出した。

少年は両手をかざして風を発射する。

足元に迫る風の塊を足を上げることで避けると、もう一つを右手で払いのける。

上条が眼前に来たところで少耳は十字を切った。

見えない障壁が生み出された。

上条の右手が突き出され、その縁界に見えないままに破壊される。右手はそのまま、少年の頬を捉える。

「がつ！」

数m先の地面に少年は倒れる。

「何で！？何で！？何で！？」

少年はバツと立ち上がると上条に背を向ける。

二ノ屋は豈ハサカバキツクハ、品ノハ

迷
つ
た。

田の前の少年はおもいにやめて、もう一度岡村に糸々に研いでしまった。

上条の十数m先で少年は血を吐いた。

「はははー。君達皆、消してやるーーー。」

高笑いしながら一つの教室へと入つていった。

「あの教室……。まあーー。あそこはあいつと僕が最初に交戦した場所だ」

「どうこいつ」とだ?」

上条が尋ねると、

「あの部屋には血だらけになつた加東が居た。血で魔法陣を描くことは昔から使われてきた手段だ」

スタイルが言つた。

「イザードがインテックスを何で救おうとしたか覚えているか?」

上条は考える。

そして、思い出した。

「吸、血鬼?」

「そうだ。あいつが三沢塾でのイザードの言葉から魔術を学んだのなら、あの教室で行われる魔術はイザードが使おうとしていて最強の“それ”かも知れない」

スタイルの言葉に上条は悪寒を感じる。

「だつたら今すぐ止めねえと

「問題ないはずだにやーー」

土御門が口を挟んだ。

「一人分、または一人分の血で生み出される魔術に大した威力はないにやー」

「だ、大丈夫なのか?」

「あの教室が戦いで壊れているなら術場としての能力が落ちるから大した被害は出ないだろ? しにやー。あいつが魔術を使つた副作用で死ぬぐらいだぜよ」

土御門の言葉を聞いて、上条は立ち上がる。

「どこに行くんだ?」

「あいつを止めにいく

「何のためにだ?」

スタイルの言葉を聞かず、上条は教室へ走り出した。

(させるかよ! あいつが誰かなんて知らないけど。苦しんで死んでくのをほつといついいわけないだろ!)

教室の前に辿りつく。

教室の真ん中には少年が立っていた。
周りには机が規則的に並んでいる。

その机にはそれぞれ赤い線で魔法陣が書かれている。

「遅かったね。これで終わりだよ!」

少年は最後の机に指を走らせる。

(こんなところで、終わらせやしねえ!)

上条は教室内へ駆け込んだ。

一番手近にあつた机の赤い文字に、

触れる。

ピキィィィィンといつ音がした。

魔術は、発動しない。

少年が倒れることは、無い。

「もう、止めろよ。こんなこと」

上条の視線は、揺らがない。

真つ直ぐに少年を見据えていた。

「僕は止めない。誰にも、僕の世界を壊させたりしない」

少年は両手を上条に向ける。

風の塊が複数放たれた。

上条は右に飛び、教壇へ飛び乗る。

風の塊は上条が入ってきたドアを廊下に吹き飛ばした。

上条は教師用の机から上半身を出した状態だ。

そこへ再び複数の風の塊が襲い掛かる。

上条はそのうちの一つを右手で打ち消した。

しかし、全てを打ち消すことは出来ず、一つが上条の背後の黒板を砕く。

撒き散らされた黒板が上条に打ち付けられた。

「……ガツ！」

上条は痛みを無理矢理押さえつける。

小さな足音が聞こえた。

その足音を聞いて、上条は決断する。

目の前の教師用の机を両手でもつと、少年の方へ投げた。

少年は机を迎撃するために左手をかざす。

机に風の塊が放たれた。

風の塊が机にぶち当たり、少年がふつと笑ったとき、

上条は、少年の真横に居た。

窓側からの視線に少年が気づいたときには、上条の右手は既に放たれている。

しかし、少年は、あせらず右手を左側へ突き出した。

放たれた風の塊は上条の腹への軌道を突き進んでいく。

「くつ……」

上条の体勢は戻らない。

ボハツ！ と炎剣が突き出された。

炎剣は上条と少年の間に、風の塊の軌道に、入る。

炎剣に風の塊が接触し、軌道が大きく上方へずれた。

上条の右手は、向きのずれた風の塊を食い破り、突き進む。

そして、正確に、

少年の左頬を捉えた。

少年の体は吹き飛び、整然と並べてあつた机を崩し、そして、沈黙した。

「はあはあ……」

上条の田の前の炎剣が消える。
戦いは終わった。

「はっ！ もう、救急車！ ！」

上条が叫ぶ。

「もう呼んでおいたこやーーー」

割られた窓の外から携帯電話を指先でつまんで振りながら土御門が答える。

「ふう…………」

安心すると上条の体から一気に力が抜けた。
横ではスタイルがバランスを崩して倒れそうになっている。
上条はそのスタイルを両手で支えて、近くの椅子に座らせた。

「ありがとな、スタイル

へ？ という顔をするスタイルに上条は言葉を続ける。

「あのとき、あいつを助けてくれたんだろ？」

上条とスタイルは倒れる少年へと視線を移した。

「別にそんなんじゃないさ。ただ、あいつが結界を使う可能性があったからね。その右手の方が確実だと思つただけさ」

スタイルはポケットから二コチンのガムが入った箱を取り出す。

「いやっ！ スタイル！ 今それを食べたら……」

土御門が言いかけたときにはスタイルは一、三粒を口の中へ放り込んでいた。

噛まないで出そうとしたのだろうが、二コチンに飢えたスタイルの体は口の中に侵入した獲物を自動で迎撃した。

「ガハッ！！」

ただでさえボロボロだった体にハバネロの衝撃が駆け抜ける。椅子を倒して床を転げまわるスタイル。

「はあ……だから言ったのににやーー」

左の拳を額に当てて土御門はあきれる。

「つ、ち、みかどあー」

地の底から響くような声をスタイルが上げた。サイレンの音が遠くから聞こえ始める。

「やばいぜい。もう行くぜよー」

土御門は教室に入り、のた打ち回るスタイルを背負つた。

「逃げるこーー、カミセーーー！」

上条は訳が分からぬがとりあえず土御門について教室を出る。

「何で逃げるんだ？」

「嘘ついたからだにゃーーー！」

「何で？」

「学校が半壊して重傷者が多数出たつていつたんだぜーーー！」

「は？ 何で？」

「それならすぐ来るだろつと思つたんだにゃーーー！」

「こしても限度があるだろーーー！」

傷だらけの体で階段を駆け下りる。

途中で土御門の背中のスタイルが喋りだした。

「僕はこれでまた転校することになるね。理由付けは適当にしててくれ

「任せせるこーーー！」

「寂しくなるな

「ふざけたことを言つたな

そう言いながらもスタイルの顔は少し綻んでいた。

16話 魔法陣（後書き）

後一回で完結です。

数日空くかもしません。

感想、レビュー、評価、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8409m/>

とある神父の潜入捜査

2012年1月8日20時51分発行